



次に来る感染症は？

2023年は1月の新型コロナ感染症（以下、コロナ）第8波から始まり、夏のうちからインフルエンザ、秋になって溶連菌感染症、プール熱、そのほかにもRSウイルス、手足口病など、様々な感染症の診療に追われた一年でした。コロナとインフルエンザに罹った人、コロナに2回罹った人、そしてインフルエンザに2回罹った人もいました。一つ一つを振り返れば風邪とひとくくりにはできないような病気ですが、度重なる子どもの発熱に苦労した方も多かったのではないのでしょうか。

今年、多種類の感染症が流行したことも、実はコロナの影響です。2020年1月に国内1例目の新型コロナが確認され、3月から学校が休校になり、緊急事態宣言が出て、保育所、幼稚園も一斉にお休みにになりました。その後の3年間も行事は中止、マスクをつけて、他人との接触を極力控える行動パターンが続きました。これらの対応はコロナ感染予防に役立ったと思いますが、その間はコロナ以外の感染症もうつる機会が減ったために流行しませんでした。免疫は、一度罹ったことがある病気に二度目は罹りにくくする能力です。ここ3年間ほど風邪に罹る機会が減っていたので、4歳ぐらいまでの子どもは免疫を獲得することなく過ごしたため、今、風邪をひきやすくなっています。しかし、流行している雑多な病気に一つ一つ罹って免疫がつけば、やがてコロナ前の状況に戻ることでしょう。

ではコロナの次に世界的に問題となる感染症は何でしょうか。予想することは困難ですが、ここ10年20年のレベルで人類に大きな影響を与えることが確実視されている感染症は耐性菌です。これは抗菌薬（抗生物質）が効かない細菌の総称です。最近、殺虫剤が効かないゴキブリが増えているという話がありますが、細菌も進化して抗菌薬が効かない種類が増えています。「診断名は肺炎です、残念ですが治療薬はありません。」そんな宣告をされる時代がやがて来ます。それを防ぐために世界中で対応策が模索されている最中です。今できることのひとつは、「風邪や中耳炎に抗生剤を使わないこと、もし使うとしたらWHOがEssential Medicinesとして推奨する抗生剤を使うこと」です。崎山小児科はそのような方針で診療をしています。

溶連菌ってどんな病気？

A群β溶血性連鎖球菌（溶連菌）という細菌が唾液などの飛沫で感染します。潜伏期間は2～5日で冬から春にかけて流行します。当院でも11月中旬頃から溶連菌のお子さんが増えてきました。

☆症状

- ・喉の痛み
- ・発熱（微熱やほとんど出ないこともある）
- ・フツフツした赤い舌
- ・腹痛や嘔吐などお腹の症状が出ることもある
- ・顔や体にざらざらした細かな発疹と痒み
- ・回復期に指の皮がむける



☆診断

医師が診察をし、感染の疑いがある場合は喉の菌を採取し、検査キットで診断します。

☆治療

抗生物質がよく効きますが、途中で内服をやめてしまうとぶり返すことがあります。急性腎炎やリウマチ熱の合併症予防のためにも全部で10日間しっかり薬を飲み切ることが大切です。治療開始から24時間以上経過し、全身状態がよくなったなら人にうつさなくなるので登園、登校ができます。許可証が必要な場合がありますので確認をしましょう。

☆感染後の尿検査

当院では発症してから約3週間後に合併症が起こっていないか確認のため、尿検査をしています。糸球体腎炎の症状はまぶたや手足のむくみ、血尿、高血圧などです。気になる症状がある時は早めに受診しましょう。

☆ホームケア

喉の痛みが強い時は熱いもの、辛いもの、酸っぱいものは避け、のどごしの良いものにしましょう。発疹は温まると痒みが強くなるので、湯舟には長く浸からないようにしましょう。爪は切ってひっかかないようにしましょう。

溶連菌は免疫がつかないので周囲に感染者がいると何度もかかることがあります。家族にうつることもあります。症状が出たら受診しましょう。

崎山先生の当番日

府中市保健センター TEL:042-368-5311

12/28(木) 夜間診療(19:30~22:00)

